TV 報道検証【報道特集】　報告書

テレビ局： TBS	番組名： 報道特集	放送日： 2018 年 6 月 2 日

出演者：日下部正樹　膳場貴子　金平栄樹　日比麻音子

検証テーマ：安倍首相と野党の動向、G7 会合、米朝首脳会談

報道トピック一覧

・日大アメフト部、
・鹿児島タクシー軽ワゴン車事故
・ロッカー乳児遺体
・三重伊勢市住宅火災
・安倍首相と野党動向
・北海道イカ水揚げ
・石川県加賀百万石行列
・東北絆まつり
・くまもん 200 万人突破
・G7 会合
・常総市中学生水難行方不明
・東京外環道新区間開通
・あおり運転防止イベント
・【特集】米朝首脳会談
・【特集】危険運転
・スポーツ報道

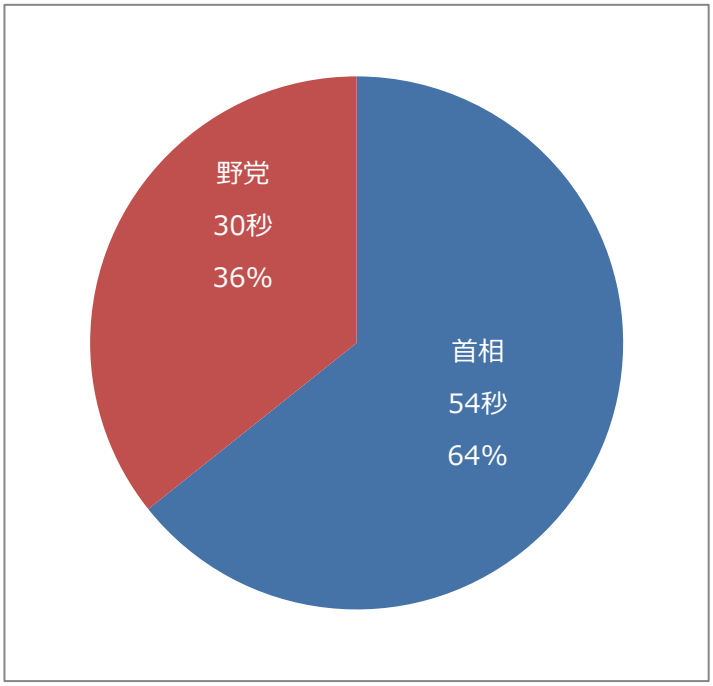
放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨

・オープニング

オープニングではスタジオで金平キャスターが「えーかつて私がロッキード事件の取材を通じて知り合った伊藤栄樹検事総長は検察は遠山の金さんのような素朴な正義感をもてと言っていました。市民の素朴な善悪の感覚からかけ離れた検察など存在する意味も価値もないと思いますが、皆さんはそして大阪地検特捜部はどうお考えでしょうか。」とコメントしていた。このシーンに当てられた時間は 20 秒だった。

・安倍首相と野党の動向：結論→やや不十分

首相と野党の動向について報じられた。このテーマに当てられた時間は 84 秒で、首相と野党、それぞれに焦点の当てられた時間の比率は以下の通りであった。



首相の動向についてはスタジオで膳場キャスターが「安倍総理は自民党の会合で財務省の決裁文書の改ざんを念頭に国民の行政に対する信頼を揺るがす事態になったと謝罪し、再発防止に向け内閣総理大臣として責任を果たしていく覚悟だと述べました。」と語った後に VTR で安倍総理が「真摯に反省し、２度とこうしたことが起こらないように全力をあげて再発防止に向け内閣総理大臣としてその責任を果たしていく覚悟でございます。」とコメントするシーンが取り上げられ、膳場キャスターによるナレーションで「また安倍総理は１２日に開催されることになった米朝首脳会談への期待を示すとともに、核武装した北朝鮮を決して容認するわけにはいかない圧力を高め、抜け道は許さないとして圧力継続の必要性を強調しました。」と伝えられた。

野党の動きについては街頭で国民民主党の大塚耕平共同代表が「事実を隠蔽し、改ざんし、廃棄をし、そして熟議を避けて権力を乱用する。こんな政治許せますか皆さん。」と訴えるシーンが取り上げられたほか、膳場キャスターによるナレーションで「一方野党党首らは森友加計問題について安倍総理のもとで、今までなかったが行われている。今の政治は異常事態だなどと批判、終盤国会を迎える中、対決姿勢を強めています。」と伝えられた。

今回はやや首相動向に偏ったものであり、首相の動向では①財務省の決裁文書改竄、②米朝首脳会談と２つの問題への対応を取り上げているのに対して、野党の動向では①財務省の決裁文書改竄という問題を中心とした政治批判のみで、②に対して野党の打ち出している方向性などは取り上げられていなかった、という点で放送法第四条一項二号「政治的に公平であること」、同四号「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」という点では尺の都合があるとはいえ、不十分なものであったといえる。

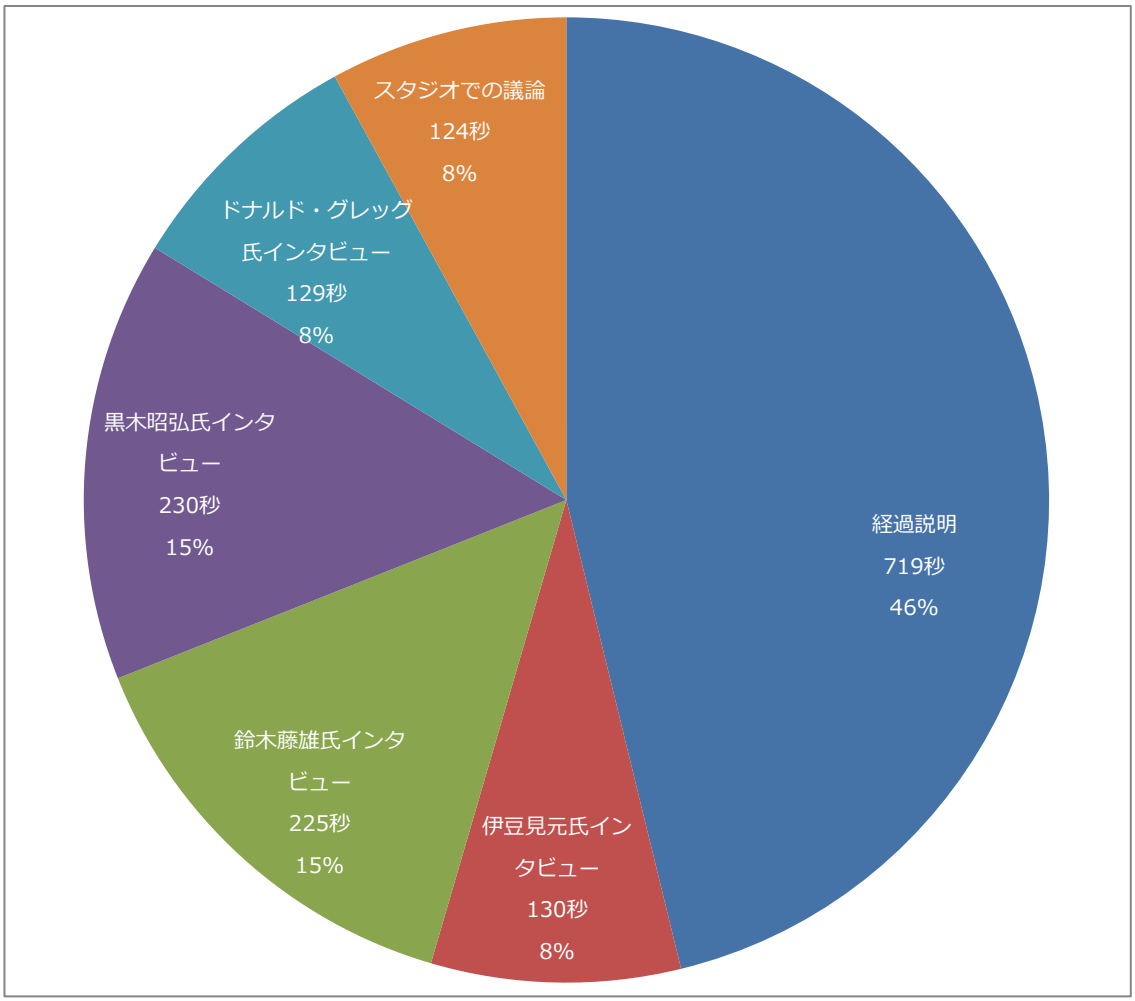
・G7 会合

カナダで開かれている G７先進７か国の財務大臣　中央銀行総裁会議は１日目の討議を終え、アメリカによる鉄鋼などの輸入制限について各国から反発する意見が相次いだことが報じられるとともに麻生太郎財務相の「追加関税措置は極めて遺憾なことであって　一方的な保護主義的な措置による内向きな政策はどの国の利益にもならない」という会見での発言が取り上げられたほか、麻生太郎財務相が会見でアメリカ以外の国の意見は一致していたからアメリカはきつかっただろうと述べたことや、会議でアメリカの輸入制限措置に対し各国から反発が相次いだことを明かしたこと、日本が WTO 世界貿易機関に訴えを起こすかどうかについては今の段階で決まっ

ているわけではないがいろいろ準備はしており今後の流れをみて検討するという考えを示したことが伝えられた。このテーマに当てられた時間は 61 秒で、放送法の観点からは特に問題は見られなかった。

・【特集】米朝首脳会談：結論→評価できる

米朝首脳会談についての特集だった。今回の報道では経緯説明、東京国際大学の伊豆見元教授へのインタビュー、元不動産会社社長で若き日にトランプと直接交渉した経験のある鈴木藤雄氏へのインタビュー、元 KEDO の原子力安全部長で日本エネルギー経済研究所の黒木昭弘氏へのインタビュー、かつて CIA のソウル支局長として対北朝鮮工作を担当した後に駐韓アメリカ大使を務めたドナルド・グレッグ氏へのインタビュー、VTR を承けてのスタジオでの議論という 6 つのポイントに分けられた。このテーマに当てられた時間は 1441 秒で、各ポイントへの時間配分および比率は以下の通りであった。



経過説明ではトランプ大統領が北朝鮮の金正恩党委員長との首脳会談を当初の予定通り今月 12 日にシンガポールで行うと発表したこと、トランプ大統領の「6 月 12 日の会談で（合意文書などに）署名することはない　これはプロセスの始まりだ。1 回の会談で終わるなんて言わないし、言ったこともない」や「もう『最大限の圧力』という言葉は使いたくない米朝関係は今いい感じなんだ」、「韓国がやるだろう。中国も。日本も支援するだろうアメリカがたくさん金を出すことにはならない。いいですかアメリカは（北朝鮮から）とても離れている。すごく遠い。日中韓は近い。近所なんだ」という発言、小野寺防衛相の「一方トランプ大統領は同時に北朝鮮が非核化に応じない限り制裁は解除しないとも言っております。引き続き圧力が維持されること。これがこの問題の解決につながると私どもは考えております。」というコメントが取り上げられたほか、アメリカと北朝鮮がシンガポ

ール、板門店、ホワイトハウスなどで協議が行われているということが伝えられた。また、他方で北朝鮮の労働新聞では「帝国主義、特に米帝に対して幻想的に接し彼らからの恩恵を期待するには革命的原則を譲歩して反帝・反米闘争から退く卑屈な行動である。」というアメリカに対する挑発的な論調が続いていることも伝えられた。

伊豆見元氏へのインタビューでは以下に朱記した２つのシーンでのやりとりが取り上げられた。

【シーン１】

ナレ「米朝首脳会談で何が動くのだろうか　専門家は。」

日下部正樹「金英哲氏の役割を改めて、」

伊豆見元（東京国際大学教授）「金正恩氏は大連に行って 2 回目の首脳会談を習近平国家主席と持ちましたけども、その時にやっぱりついていったのは金英哲氏なんですね。そこでの話が重要で、それをまたポンペオ氏の話でもってこうとした。朝鮮戦争の終結したという話をですね一番早くやろうとすると、じつはシンガポールで 6 月 12 日に米朝が終わります。そうするとその翌日に文在寅大統領と習近平主席がシンガポールにきて、それで戦争は終わったぞという宣言ですねこれ極めて象徴的な話で宣言だけでさっと帰っちゃうって話ですけどそれをやろうとしている可能性があるんですね。」

【シーン２、労働新聞の論調が取り上げられたことを承けて】

ナレ「こうしたことから北朝鮮内部が一枚岩ではないのでは見方もあるが、伊豆見氏は。」

伊豆見「あまり外に向けた話ではないですね　国内向けにはやっぱりそうやって言ってこないといけない。アメリカに対しては原則論をきちっと言ってるぞということを示さなきゃいけない。」

ナレ「伊豆見氏は米朝首脳会談が成功した場合、両者にとってさらに都合のよいこんなシナリオも考えられるという。」

伊豆見「ぼくは米朝首脳会談は最低でも 2 回あると思うんですね。9 月の国連総会に私は金正恩氏が一般演説をやりにニューヨークに行くと思います。そうするとニューヨークで 2 回目のトランプ大統領ともなると、そこが重要なんですよね。もうそこが中間選挙の 1 か月前だから、その時に例えば ICBM の話だとか何か相当いい話とかをねすると、こりゃー相当ききますよね。」

日下部正樹「一回目うまくいけばぜったいうまくいきますよね？」

伊豆見「いきますね、そう、それは国連総会で彼が英語でスピーチするかどうかが注目。本当は英語も流暢なんでしょうからね。それをやればね。だからどんどん彼は自分のセルフイメージ変えてきてるわけでしょ？」

鈴木藤雄氏へのインタビューでは以下に朱記したやりとりが取り上げられた。

ナレ「一旦は米朝首脳会談の中止を発表するなど北朝鮮を揺さぶるトランプ氏。かつてその交渉術をじかに体験した日本人がいる。不動産会社の社長だった鈴木藤雄氏だ。」

鈴木藤雄（元不動産会社社長、82 歳）「1989 年のね、2 月の何日かですよねニューヨークのトランプタワーの彼のオフィスを　社長室です。」

ナレ「当時の日本はバブルの真っ只中、トランプ氏がフロリダ州ウエストパームビーチにあるコンドミニアムを買わないかと持ちかけてきたため鈴木氏はトランプタワーに出向いた。赤いネクタイと特徴的なサインは今と同じだ。ウエストパームビーチという町はトランプ氏が安倍総理とゴルフ会談をした一大リゾート地だ。トランプ氏の第一印象について鈴木氏は。」

鈴木藤雄「入った途端にトランプがさんが、いわゆるうちの社長に、もう立ち話でなにか知らないけどまくしたてているんですね。言葉のやり取りを 15 分くらい続きましたかね。」

膳場貴子「え一着席してってなる前に。」

鈴木藤雄「だから僕が脇にいてね、なんだこの若造という感じに僕は思いましたよ。常識がない人物だと感じた

という鈴木氏。」
ナレ「しかしあることをきっかけにトランプ氏の態度は急に友好的になったという。」
鈴木藤雄「たまたまトランプの自伝　自伝が日本語訳になった本を 2 冊僕はもってたんです。で一冊は彼に日本でもこういう本が出てるよと。それから態度が変わったみたいね。常識がなったね。だからこの人は自分本位だなーと。鉄砲玉みたいなしゃべり方してましたよ。」
膳場貴子「鉄砲玉みたいに？」
鈴木藤雄「うん要するにポンポンポンポン早口でね。」
膳場貴子「攻撃的っていうこともありますかね？」
鈴木藤雄「またすごい攻撃的だったね。顔とそれから口元も見てたけどね。」
ナレ「「鈴木氏はトランプ氏の不動産売買を仲介することで合意したが、後日トランプ氏はすでに決まっていた手数料を値切って来たという。」
鈴木藤雄「ずいぶんけち臭い男だと思ったね　はっきり言って。いわゆるビジネスのルールには違反するなという感じじゃないんすかね。」
ナレ「時にはけんか腰でまくしたて自分のペースにもちこむ交渉術。それまで決まっていたことを覆す強引なやり方などはいずれも現在の外交手法と通じる面もある。」
鈴木藤雄「だからそういう意味で国と国との取引でも何が起こるかもわからないかもしれないね。それを怖がっているのかもしれないよ北朝鮮は。僕はトランプのほうが数段上だと思いますよ。」
　黒木昭弘氏へのインタビューでは以下に朱記した３つのシーンでのやりとりが取り上げられた。
【シーン１】
ナレ「KEDO の原子力安全部長として北朝鮮を 50 回以上訪れた黒木昭弘氏はこう語る。」
黒木昭弘（日本エネルギー経済研究所）「北朝鮮との場合は合意をとったとしても、さあ実施してくださいといった途端にいやこれをやってもらわないと実施できないとかあれをやってもらわないと実施できないとか必ずそういうのが出てこれはもう何回やっても同じと起こったんで、まあそういうもんだと。だから韓国人の職員なんかも最初はやっぱり貧しい北を助けようと思ってくるんですけども、だって KEDO を帰るときにはですねもうあいつらほんとにうそつきだととても付き合いきれないと。」
【シーン２】
ナレ「先週北朝鮮が海外メディアに公開した核実験場の爆破について黒木氏は」
黒木昭弘「まあ予想通り非常に茶番劇というか、あのほとんど意味のないことをやっているんですけども、それでも象徴的なんで世界が騙されてくれたらいいなと彼らが思っていたと思うんですけど、あの爆破した建物もほとんどまあその掘立小屋みたいなやつで基地、中央指令室みたいなところとかっていうのは全く手をつけていないと、いうことを考えると能力的にはいつでも再開できるそれがっていうではないかなと。」
【シーン３】
ナレ「黒木氏が想定するそのステップは北朝鮮がまず各施設や核実験を停止し、すべての核兵器の内容について申告、査察を受け入れて実態を確認したのち、核兵器などを完全に廃棄したうえで後戻りできないことが検証されることだ。」
黒木昭弘「彼らが例えば自分たちが核兵器を 10 個持っていますといった場合その 10 個の場所を教えてもらわなきゃいけない。難しいのは 10 個しか持ってませんと申告があっていろいろ検証してみると、どうもそれ以上もってそうだとそういうことになると査察も含めてですね、そこで止まっちゃうわけですね。」
金平茂紀「そうするとここ大事ですね。」

黒木昭弘「ええここが北がどれだけ協力的にやってくれるかということだと思うんです。」
ナレ「北朝鮮が申告すべき対象は核兵器や各施設のほか、設計図密輸ルート核技術者など多岐にわたるになる。設計図やデータなどが残っていればもう一回再開することも不可能ではない。だからそこをつぶしてしまえということなんですけれども、その設計図やデータというのはまあ完全に廃棄したことを証明するのは悪魔の証明でできないと思いますね。」
ナレ「北朝鮮はプルトニウム型の核実験を繰り返してきたとされるが黒木氏は北朝鮮が高濃縮ウランを保持しているとみている。」
黒木昭弘「一番難しいものの一つは核濃縮の話でして、北は今でも自分たちは濃縮はやっていないということを言っておりますし、だからウラン濃縮型の爆弾というのももちろん無いはずだ、濃縮工場もないと設備もないと同じことを言いだせば、これはもう北朝鮮中の軍事設備を全部 1 個ずつ点検して本当にないのかどうかあるいは地下の秘密工場がないのかということまで調べないとならないとなったらあの時間も人員もお金も相当かかるとおもっています。」

ドナルド・グレッグ氏へのインタビューでは以下に朱記したやりとりが取り上げられた。

ナレ「アメリカは CVID の受け入れと早期の実行を北朝鮮に求めているこのやり方に懐疑的な見方もある。かつて CIA のソウル支局長として対北朝鮮工作を担当し、その後駐韓アメリカ大使を務めたドナルド・グレッグ氏。」
金平茂紀「CVID についてどうお考えですか？」
ドナルド・グレッグ（元駐韓米国大使）「もう聞き飽きたセリフです。CVID は難しすぎる目標です。北朝鮮の人と話すたびに毎回あり得ない、勘弁してといわれます。CVID ではうまくいかないと北朝鮮の人は言います。最終的な目標ではありますが、最初の一歩は信頼関係を構築することから始めるべきです。直ちに CVID が達成されるべきだというのは愚かな考えです。」
ナレ「経済的な苦境にあえぎながらも強硬姿勢を貫いてきた北朝鮮だが、変化しつつあるとグレッグ氏はみている。」
ドナルド・グレッグ「私は 2002 年に初めて北朝鮮に行きました。道路はデコボコ車はボロボロ食べ物はお粗末でした。その後私は 5 回北朝鮮を訪れましたがそのたびに改善されていくのを見てきました。北朝鮮は 10 年前とは状況が大きく異なります。変化は私たちが望んだから起きたのではなく彼ら自身が変わりたいと思ったからです。会談は大失敗にはならず少しは進展すると思います。わたしは楽観的なのです。」
金平茂紀「北は核を放棄しますか？」
ドナルド・グレッグ「最終的にはね」

VTR を承けてスタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられた。

膳場貴子「トランプ氏とディールしたことのある鈴木さんがおっしゃていた常識外れの交渉術。あの今回の米朝首脳会談をめぐっても中止を表明したりかと思ったら制裁対象の人物をホワイトハウスに呼んだり結局は当初日程で行うとなるなどトランプ大統領らしいやり方でしたね。」
日下部正樹「本当に先週の中止発表は何だったという感じですけれどもトランプ大統領はよくね、あるかもしれないし、ないかもしれないっていうような人を煙に巻くような言い方よくするんですけども今回のね大統領の発言で割とはっきりと言っているのは、シンガポール会談で何かに署名することはないと、1 回の会談で非核化が実現するとはいっていないとつまりあの伊豆見先生も指摘しましたけれども複数回首脳会談をやることを割と明言しているんですね。その中で気になるのは非核化について急ぐことはないと北朝鮮が求めている段階的な非核化に対してですね理解を示すようなこんな発言をしている　あともう 1 つ最大限の圧力という言葉ももう使いたくないという発言も併せてみるとだんだん日本政府の主張とは離れていくような流れになっていますよね。」

膳場貴子「そうですよね。」
金平茂紀「そのね、キーワードになっている CVID っていうその完全な　検証可能な　不可逆的な　廃棄ってやつですけれどもね　これどのくらいの時間枠でね考えればいいことなのかなということなんですがアメリカの専門家でスタンフォード大学のジークフリードヘッカーていう学者がいるんですけども、この人は政府への助言も行っている人ですけども、ニューヨークタイムズに答えた中ではですね CVID は最低でも 15 年かかるって言ってるんですよね。ドナルド・グレッグ氏もこれはなんか相当に政治的な高いハードルだ見たいな言い方をしていましたし、黒木さんも技術者としてはその時間も人員もお金も相当かかるっていう言い方。この分野での今度 6 月 12 日での画期的な進展ていうのはあまり期待できないじゃないかなとその代わりにカードとして両国が切ってくる可能性があるのは朝鮮戦争の終結宣言だろうと思いますね。」
膳場貴子「はい。」

今回の報道では放送法の観点からは特に問題は見られず、米朝首脳会談について北朝鮮内での世論と金正恩やトランプ大統領のスタイル、これまでの北朝鮮の対応や非核化など様々なポイントが取り上げられていて、放送法第四条一項四号「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」という点では評価できるものだった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

検証者所感

・オープニング

金平キャスターの「えーかつて私がロッキード事件の取材を通じて知り合った伊藤栄樹検事総長は検察は遠山の金さんのような素朴な正義感を持てと言っていました。市民の素朴な善悪の感覚からかけ離れた検察など存在する意味も価値もないと思いますが、皆さんはそして大阪地検特捜部はどうお考えでしょうか。」という冒頭でのコメントであるが、今回はロッキード事件についても今回の大阪地検特捜部の判断についても報道特集の中では全く触れられていなかった。この伊藤栄樹氏の「検察は遠山の金さんのような素朴な正義感を持て」というのは 1985 年、検事総長就任時のコメントである。検察のトップでありもちろん法律のプロでもある伊藤栄樹検事総長が「検察は遠山の金さんのような素朴な正義感を持て」というのと、法律については素人である金平キャスターが「検察は遠山の金さんのような素朴な正義感を持て」という伊藤検事総長の言葉を引き合いに「市民の素朴な善悪の感覚からかけ離れた検察など存在する意味も価値もない」というのとでは意味合いが全く変わってくる。また、そもそも「市民の素朴な善悪の感覚」と「推定無罪の原則を前提に法と証拠に基づいて事実確認をし十分な嫌疑がある場合は起訴する」という姿勢は全くかけ離れたものであり、「市民の素朴な善悪の感覚」と検察に求められる「遠山の金さんのような素朴な正義感」というのは全く一致するものではなく、時には対立すらするものであるが、そうした 2 つをつなげて同列のものであるように語る金平キャスターには驚いた。

今回の大阪地検特捜部の対応を問題とするのであれば、やはり報道の中でも大阪地検特捜部がなぜ起訴や起訴猶予ではなく不起訴という判断に至ったのかという問題については取り上げるべきであり、それを取り上げずにオープニングで上記のコメントのような発言をするのはいささか問題のあるものではないだろうか。

今回は報道内容の面では評価できるものだったため、こうした冒頭の金平キャスターのお粗末なコメントが残念だった。